
星フル空ノ下ノ街、腐ッタ奴ラニ火ヲカケロ、ドンナ馬鹿デモ燃エレバ同ジ

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星フル空ノ下ノ街、腐ッタ奴ラニ火ヲカケロ、ドンナ馬鹿デモ燃エレバ同ジ

【Nコード】

N0528I

【作者名】

ふらじゃいる

【あらすじ】

衝動だけで書いたSF短編です。話とも言えないくらい。これを未完と見るか結していると見るかは読者様次第です。一応誤っておきますすみません。

星降る空の下の街、腐った奴らに火をかけろ、どんな馬鹿でも燃えれば同じ

かつて宇宙航行船の職人惑星と呼ばれていたスタッドには、ゴミクズみたいな人間しか残っていないかった。

腐食した装甲板の破片や時代遅れの計器類の残骸、稀少物質だけ取り除いた一見すると穴ぼこだらけのクリスタルみたいな記憶媒体の山、旧式で汚染状態のままの極小核融合炉が内蔵された法螺貝みたいなエンジンなんかのガラクタだらけの街。

そんな風景は今も昔も変わらない。

この星の連中はモノを捨てるのには頓着しないが、完全に見限って資源を再利用しようと考える奴が少ないのだ。だからゴミだけ増える。

そこには『いつかまた使ってやろう』という職人たちの思いがあったのだ。けれどそれが、『片付けるのが面倒くさい』になったのはいつからだっただろう。

そうだ。時代の流れだった。

器用さと頑固さで有名なスタッダリアンは最初、地球人たちにとって宇宙の奇跡と呼べるほどの名匠であったが、粘り強く先取的で合理的な地球人たちの手によって生み出されたスタッダリストによって全盛期を過ぎたスポーツ選手みたいになった。

スタッダリストというのは簡単に言うとロボットだ。だが、地球人は半炭素生物だと言っている。俺たちスタッダリアンに言わせて貰えば地球人の犬だ。いや、犬はペットだからなお酷い。奴隷だ。だが、地球人たちは親愛なる仲間と言っている。この文章は地球の言語で記述しているが、スタッド語では地球人が何を言おうとスタッダリストはロボットで奴隷なのだ。スタッダリアンには曖昧な表現など許されない！

とにかく地球人はスタッダリストを生み出し、どデカイ工場を作り出した。工場はスタッダリアンの百億倍もの役割を果たした。それは疑いない事実だ。スタッダリアンは職人なのだ。良い仕事を認めないわけにはいかない！

……職人が一番喜びを感じる瞬間はいつだと思う？

——良い作品が出来たとき？

——いや、少し遡って、良い作品のアイデアが浮かんだとき？

——少し進んで、良い作品を褒められたとき？

どれも違う。職人が一番喜びを感じる瞬間は、

——作品を作ってくれと頼られたときだ！

自分のこの手にしか作れないモノがある。それを作ってくれと頼まれる。この上にどんな喜びがあろう！

けれど、もう地球人も周辺種族もスタッダリアンには頼まない。スタッダリストの工場があるのだ。俺たちは無用になったってわけさ。

それからだろう。この街の職人たちの顔をいつも美しく見せていた脂汗が渴いていったのは。

「俺はこの星を見限った！ 宇宙一の船乗りになるために飛んでいくぜ！」

俺の友人のズッドーン（地球語では言いにくい。爆発するような音なのだ。以下、ズッドと略す）は言う。

「どこまでも行くぜ！ 太陽系の火星に寄って延命手術を受けてから、この宇宙のすべてを見てきてやる！」

断っておこう。友人はスタッツド語しか話せない。スタッツド語は単純明快だ。

「俺は行くぜ！ どこまでもどこまでも！ 無限の燃料はこの魂に積んである！」

ズッドは言って、いつも額につけているお気に入りのおゴーグルを両目に被せた。

スタッツダリアンは過去には体の形を自由に變形させることができた種だったので、人類との遭遇以後、ほぼ人類と同じ体形をしている。現在のスタッツダリアンは變形能力が低下し、手先しか変えられない。

「お前も来いよ！ 機関士にしてやる！」

ズッドの声はいちいち大きい。俺は思わず耳を塞いだ。そのくらいでちょうどいいのだ。

「……船はどうするんだ？」

ついて行く気など微塵もなかったが、俺は一応こう言った。地球語を学ぶと、実に複雑な気持ちになるのだ。単純明快なズッドが羨ましくもあり、不安でもある。

「船？ 愚問だな！ そこいらのガラクタを集めりゃ、火星に行ける船くらい作れるだろ！」

「エンジンと制御システムに金は必要だ」

地球語なら、「ある程度形にはなるだろうが、そんな船じゃ第二宇宙速度を突破して宇宙の彼方へ自殺航行だな」と言っているところだ。

「じゃあ盗む！ 必要なもんは全部な！ 俺はもう一分一秒も待っちゃいられねえ！」

単純明快。天晴れな返答だ。

「星降る空の下の街！ 腐った奴らに火をかけろ！ どんな馬鹿でも燃えれば同じ！」

最近この星で人気になっている音楽グループの歌詞の一部を声高らかに歌うズッド。ズッドの気持ちも分からないわけじゃない。

俺も嫌だった。特許料と土地私有化権料で食いつないでいる俺たちスタッドリアンが。

俺たちには俺たちにしかできないことがあるはずだ。地球人が生み出したスタッドリストは確かに素晴らしいが、俺は地球語を学んで知ったのだ。この宇宙に俺たちが良い仕事をできる場所が残っていないということは無いはずだ、ということ。

「俺はやるぜ！ 必ずやるぜ！ 最短距離は直線だ！」

ズッドが歌いながら歩き出す。そこはありふれたガラクタ山だった。

「工場へ行くのか？ やめろ！ あそこは治外法権だ！」

「ちがいは…なんだって？ スタッド語で言ってくれよ！」

「殺されても文句が言えないぞ！」

「シュパーン！ お前は温度が低いぜ！ そんなこっちゃすぐ死ぬぞ！ ボーっとしてる時間は無意味なんだ！」

シュパーンというのは俺の名だ。音としては地球のスポーツの野球のキャッチャーミットで速球を受けたときの音に近い。我ながら地味だが、親が悩んだ末つけてくれたろう名前だから誇りは持っている。

「星降る空の下の街！ 腐った奴らに火をかけろ！ どんな馬鹿でも燃えれば同じ！」

友人は歌いながら歩いていってしまった。

空を見る。星が降っているように見える。

スタッドリストの工場からは数限りない宇宙航行船が飛び出していく。それら航行船は、大気中で美しい花火のような輝きを空に放ちながら天へ昇るのだ。

職人氣質のスタッドリアンは口にこそ出さないが、実際スタッド

リストを恨んでいる。

だが、この惑星の空に幻想的な星を降らせてくれているのだけには、唯一、喜んでいた。

お祭りのような空の下、確かに俺たちは腐っていた。何もできない自分に嫌気がさし、何もしないで馬鹿になっていた。

「……そうかもしれないな」

地球語でつぶやくと、くすぶっていた自分に気づく。

「俺たちは、どこへだって行ける」

スタッド語でそう言って、俺は立った。

——俺の中にある燃料はどれくらいか、燃え尽きるまで試してみよう。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528i/>

星フル空ノ下ノ街、腐ッタ奴ラニ火ヲカケロ、ドンナ馬鹿デモ燃エレバ同ジ

2010年10月8日15時14分発行